

志賀直哉年譜考 (四)

——明治三十一年から明治三十三年まで——

生 井 知 子

明治三十一年 (一八九八) (数え十六歳・満十四〜十五歳)

この頃か? 直哉は、高崎弓彦の妹・ツタを恋する。(M44・1・13日記に《十三年前の恋人》とある。) ↓『速夫の妹』のモデル

2・26 この日発行の「学習院輔仁会雑誌」第四十九号に、近衛篤磨が『学生の濫交を禁ずべし』との論文を寄せ、学生間の

みだりな交際を慎むようにと述べる。

この頃か? 近衛篤磨が、志賀家の関係者を介し、直哉が森田明次と遊んでいるのは悪影響を受けるから止すようにと注意する。

森田明次は非常に警沢で不良に近い方と思われていた。志賀直方は、「直哉が森田に影響しても、森田から直哉が影響されることは決してない」と家族に言ってくれる。(『夢から憶ひ出す』)

3・15 志賀正斉の妻・幾が死去。(志賀家系図)

3・20 佐本鎔蔵・ハナ夫妻の息子・謹三が生まれる。夫妻の間には他に司、鉦吾、鉄六、知七、妙子が生まれる。(川村渡

『伊勢亀山・志賀直哉の文字』)

4・26 隅田川上流で、輔仁会の第四回端艇競漕会が開催される。(『学習院一覽 明治三十一年九月〜三十二年八月』「輔仁会記事摘

要」)

- 5・21 学習院で剣道大会。(『学習院一覽 明治三十一年九月〜三十二年八月』「記事摘要」)
- 6・24 皇太子が学習院に臨御。(『学習院一覽 明治三十一年九月〜三十二年八月』「記事摘要」)
- 7・15 学習院の卒業証書授与式が赤坂離宮で挙行される。(『学習院一覽 明治三十一年九月〜三十二年八月』「記事摘要」)
- 中等学科四年に進級に際し、直哉は、落第。(新『志賀直哉全集』年譜)
- 一つでも五点以下があれば落第になるのに、要領が悪く、和文英訳など全然書かなかつたため。(『S君との雑談』)
- 三週間に及ぶ片瀬遊泳演習開始。参加者は百十人余り。(『学習院一覽 明治三十一年九月〜三十二年八月』「記事摘要」)
- 9 志賀直方、学習院中等学科六年に復学を許される。(阿川弘之『志賀直哉』(新『志賀直哉全集』⑩日記人名注))
- 9・30 この時点で、三年級甲組は、川村弘、志賀直哉、林三郎、小川武一、三浦松二郎、九鬼亜礼、九條良致、徳川家正、齊藤義雄、海江田鷹次郎、瓜生武雄、本多実芳、広幡忠隆、伊東二郎丸、有馬頼寧、鳥居忠一、南部利淳、園田英彦、松平義為、田中平一、松浦純、大谷善八郎、三島弥吉、柴山昌生、岩倉具広、恒久王、伊江朝助、市野季雄、河野寿男。有馬生馬は中等学科三年級乙組。(『学習院一覽 明治三十一年九月〜三十二年八月』)
- この年か?
- 月・水・金の最後の時間は武課で、兵式教練や器械体操があつたが、直哉は、白紙に保証人の印の押してある武課の欠席届けを何枚も持っていて、友達に書かせて学生監に出していた。(有馬頼寧『回想の七十年』)
- 徳川家正の仇名は「將軍様」、徳川慶久は「きゅう」、裏松友光は「にう」、北尾富烈は「ばあ」、武者小路実篤は「おはぎ」、有馬頼寧は「あんまさん」、細川護立は「豆」、諸岡甲松は「狎」、松平春光は「ぼつ」、海江田幸吉は「たんつ」、大河内輝耕は「じゃんじゃら」、溝口は「味噌」。(有馬頼寧『回想の七十年』)
- 輔仁会の第二回陸上運動会が開催される。(『学習院一覽 明治三十一年九月〜三十二年八月』「輔仁会記事摘要」)
- 10・28 中等学科三年級以上の学生二百一名が日光地方へ四泊行軍。(『学習院一覽 明治三十一年九月〜三十二年八月』「記事摘要」)
- 11・19 学習院で柔道大会。(『学習院一覽 明治三十一年九月〜三十二年八月』「記事摘要」)

12・3

皇太子が学習院に臨御。(『学習院一覽 明治三十一年九月〜三十二年八月』「記事摘要」)

この年か？

(十五六の頃)

開通した常磐線で、志賀直方と直哉は二人で相馬中村に初めて行く。(『祖父』九)

この年か？

(十六七)

佐本ふくが御嶽講に凝り、金をつぎ込み、佐本家が破産しかける。志賀直温が第一銀行行員である佐本鎔蔵を釜山支店に転勤させてもらい、ふくを三重県徳居の川村きやうの許に蟄居させる。その後、ふくは秘かに東京に舞い戻り、入谷の寺に部屋を借りる。直哉は毎月六円の小遣いのうち一円をふくに贈る。(『実母の手紙』(川村渡『伊勢亀山・志賀直哉の文字』)

明治三十二年(一八九九)

(数え十七歳・満十五〜十六歳)

2・16

異母弟・志賀直三が生まれる。(志賀家系図) 志賀直道が命名した。(『暗夜行路』草稿2-1)

この頃、佐本ふくに対して、志賀浩が、「万一、志賀直温が、直哉を廃嫡して直三を跡継ぎにするような事があったら、自分は直三を生かしてはおかない。」と発言する。佐本ふくは喜ぶが、内心、直哉の地位を危ぶんでいた志賀留女は、「直哉が跡を継ぐ事は、浩の嫁入り前から決まっている事だ。そんな事を問題にするだけ、浩の考え方は悪い。」と喋って浩を叱る。(『暗夜行路』草稿2-1)

妹や弟は、祖父を「お祖父さん」、父を「お父さん」、母を「かあさん」、直哉を「お兄様」と呼んだ。直哉は父を「おとっつあん」「おとっさん」、母を「おっかさん」と呼んだ。幼少期、直三は直哉を、志賀家の主人筋に当たる殿様の隠し子ではないかと考える。(志賀直三『阿呆伝』)

3・4

学習院で剣道大会。(『学習院一覽 明治三十二年九月〜三十三年八月』「記事摘要」)

3・15 近衛公爵海外漫遊送別会を兼ねて、輔仁会大会開催。(学習院一覽 明治三十二年九月〜三十三年八月)「輔仁会記事摘要」
 4・12 中等学科三年級以上の学生百十九名が千葉・東金・佐倉地方へ三泊行軍。(学習院一覽 明治三十二年九月〜三十三年八

月)「記事摘要」

4・21 隅田川上流で、輔仁会の第五回端艇競漕会が開催される。(学習院一覽 明治三十二年九月〜三十三年八月)「輔仁会記事摘

要」

この頃か? 直哉は地理の授業中に無断で窓から唾を吐き、山上万次郎先生に胸ぐらを突き上げられる。山上先生が海軍大学の教

官となるため学習院を辞めることになって、最後の授業だった。(『山荘雑話』「山上万次郎先生」)

7・15 学習院の卒業証書授与式が学習院正堂で举行される。(学習院一覽 明治三十二年九月〜三十三年八月)「記事摘要」

この年の夏か? / 前年の夏か? (里見淳・十二の夏)

直哉は、鎌倉の別荘に有島生馬を訪問し、由がえりなどで川に飛込んで遊ぶ。(里見淳「君と私」二)

この年の夏か?

学習院の水泳で、直哉は江の島一周をし、「白」に進級。(『蝕まれた友情』一)

初めは「赤白」の水泳帽、それから「赤」「青」「白」と進級。「青」の時に江の島一周をし、最後に鎌倉江の島間を泳いで卒業。(有馬頼寧「七十年の回想」)

片瀬の水泳の宿舎で、直哉や有島生馬は素人芝居をした。南部と黒川(?)が乞食役、有島生馬は駕籠に乗る殿様役、駕籠かきが柴山昌生と松方義輔、富山久太郎が親方。その時、杉村陽太郎(M32・2「学習院輔仁会雑誌」51号「雑報」によれば、M31・5退学)は転校してもういなかった。(『白樺』座談会)

『山荘雑話』「寅年」に書かれている「忠度」という茶番がこれか? 小さな社の神主の家が宿舎で、床の間にあった虎の置物を使った余興を考えたがうまく行かず、最後に「忠度」を考えた。有島生馬が忠度役、直哉はその家来だっ

たという。

この頃か？ (一六七の頃)

直哉は水泳から帰って、股に田虫が出来る。なかなか直らず、この田虫が手淫の習慣を助ける事となる。(未定稿12)

『或る旅行記 青木と志賀と、及び其周囲』補② p190~191)

9 中等学科四年に進級。

9 30 この時点で、四年級甲組は、伊達良春、立花恭忠、松平武、井伊直忠、細川護立、二條德基、塩谷良、松前広致、井

上正英、本多実芳、瓜生武雄、徳川家正、九條良致、川村弘、市野季雄、伊東二郎丸、海江田鷹次郎、有馬頼寧、鳥居忠一、志賀直哉、松浦純、南部利淳、岩倉具広、林三郎、広幡忠隆、斎藤義雄、松平義為、柴山昌生、三島弥吉、

園田英彦、佐野智勝。有島生馬は四年級乙組。(『学習院一覽 明治三十二年九月~三十三年八月』)

10 18 輔仁会の第三回陸上運動会が開催される。(『学習院一覽 明治三十一年九月~三十三年八月』「輔仁会記事摘要」)

10 20 中等学科三年級以上の学生二百三十五名が磯部地方へ三泊行軍。(『学習院一覽 明治三十二年九月~三十三年八月』「記事

摘要」)

11 11 学習院で柔道大会。(『学習院一覽 明治三十二年九月~三十三年八月』「記事摘要」)

11 30 高等学科一年の志賀直方が、学習院を退学。陸軍士官学校に進学した。直方は、陸軍士官学校十三期生で、明治三十

四年に卒業。(『新『志賀直哉全集』⑩日記人名注』)

この年か？/前年か？ (十五、大塚伝道の二年前) (買って貰って二年程して) (買って貰って三四年経って、十六か七)

直哉は、自転車を買ひ換えるに際して、ホワイト・フライヤーが欲しかったが、どこで手に入れられるか分からず悩む。森田明次に勧められ、神田錦町の萩原で、百八十円(百七、八十円)のコロンビヤ社のクリーヴランドを買おうと考へ、自分の自転車を八十円(五十円)で下取して貰うが、他の店で百四十円(百三十円)のランブラーを買ってしま

う。森田に萩原がうまくベテンにかけられたと言っていたと告げられ、萩原に悪意を抱く。(草稿『第三篇』二)(或る男、其姉の死)『自転車』関連草稿六)(『自転車』)

この年か？ (一六七)

直哉は、三級下の美少年に心から執着し、その家の脇でわざと自転車をこわして預けて帰る。(『暗夜行路』草稿13十五)↓『暗夜行路』(第三二二)のモデル
この前後の年か？ (一六七歳の頃) (宗教を聴く迄)

直哉は、法科大学で経済学を学んで、貿易商人になりたいと思う。一種の快樂主義的な気持ちで大金持ちになった。その傍らで大きな著述をすることなどを夢想する。(『荆棘の冠』序)『青貝帖』『身辺記』関連草稿)(草稿『第三篇』二)(『大津順吉』第一一)

明治三十三年(一九〇〇) (数え十八歳・満十六・十七歳)

1・1 直哉は、自転車に乗った姿を写真撮影。(新潮日本文学アルバム 志賀直哉)掲載・写真)

3・? 軍事教練後、有島生馬、肋膜炎を病む。長く後養生をし、この年、有島生馬は落第。(『初期白樺派文学集』有島生馬年譜)

(有島生馬『思い出の我』)

春 直哉ら、ボートレースで優勝。甘露寺受長も一緒。『甘露寺受長「背広の天皇」序』にも回想がある。(字研『現代日

本文学アルバム 志賀直哉』掲載・写真)

ボートの選手仲間に肥前平戸城主・松浦家の松浦純がいた。(早春の旅』二)

高崎の殿様の大河内輝耕はボートで一緒だった。直哉がセコンド・チャンピオンの時、ファースト・チャンピオンをしていた。(座談会『焚火』のころ)

直哉がボートの選手をして言問の先の鳥松に泊まっていた時、従妹の山崎すが、茶屋に出ている。(対談『緑蔭閑談』)

学習院では学生をA・B・Cの三組にわけ優勝を競っていた。中等学科に進む時、A・B・Cの代表者が、学生を三分した。帝大は法科が青、工科が白、医科が赤。一高は一部が青、二部が白、三部が赤。高商はHが青、Cが白、Sが赤。学習院はAが赤、Bが海老茶、Cが青。四校の間でも色別に結合した。学習院のB組は白と組んだ。A組には有馬頼寧、渡辺礼、織田信恒、木戸幸一、長与善郎、松方義輔、黒田長敬、新莊魏、B組には岩下家一、田尻鉄太郎、C組には志賀直哉、大河内輝耕、三島弥彦などがいた。(有馬頼寧『回想の七十年』)

細川護立・長与善郎・松方義輔はA、松方正熊はB、松方金次郎はC。(座談会『学習院時代を語る』)

草稿『若い銀行員』に、ボート仲間として、新莊、関四(関口四郎)、赤ペン(井上勝の養子になった松浦純)、ヒョー兵衛(東郷彪)などの名前が挙がっている。

有島生馬、鎌倉に転地。(『初期白樺派文学集』有島生馬年譜)

5・?

夏

直哉は、山形の聯隊に行っていた志賀直方に会い旁々、山形に行き、三島章道の祖父・三島通庸が作った真っ直ぐな道を通って山寺に寄り、大石田から最上川を下って、酒田・象潟・本荘・秋田・男鹿半島・能代・大館・浅虫などを旅行。黒木三次が一緒。森田明次も参加予定だったが、病気で取り止めた。直哉は破約を怒り、森田が死ぬまで会わなかった。直哉は、象潟の海岸の道を十八里ほど、炎天下、人力車に乗りながら徳富蘆花『不如帰』(M33・1刊)を読んで涙を流した。男鹿半島のつけ根の海岸で観た、鳥海山の上に懸かった満月が、直哉が生涯で観た最も美しい月。(『夢から憶ひ出す』(対談『作家の素顔』)、『黒木三次君と』)、『山荘雑話』「月見」、『最上川』)、『随想三夜』「私の『奥の細道』」、『書き初めた頃』)

この年の夏か? (キリスト教に接する前年の夏、十七)(二十五六の時)

- 直哉は、自分と同年くらいの女中に足を揉ませているうちに激しい欲情が起こる。しかし、相手が怯えたので放免。
 (草稿『第三篇』七※まき) (『大津順吉』関連草稿※瀧) (手帳6) 補⑤ p.139~140※M) (手帳13) 補⑥ p.26「濁水」四※瀧)
- 中等学科五年に進級。……………
- 鎌倉の有島生馬から来信。直哉が自転車から落ちて膝頭を怪我したことを見舞われる。(『志賀直哉宛書簡』)
- 9・16 皇太子、学習院に臨御。(M33・12「学習院輔仁会雑誌」53号「雑報」)
- 9・24 第一版『帝国鉄道要鑑』に、総武鉄道株式会社の前期配当率一割三分、社長は本間英一郎、取締役・青田綱三、会計係係長・志賀直温、甲武鉄道株式会社の前期配当率一割五分と出る。
- 9・30 森田明次が肺病で死去。友人は胃病と言われていた。その後、直哉は長年にわたり、森田が実は生きているという夢を見る。(『夢から憶ひ出す』(M33・9・16志賀直哉宛有島生馬書簡) (『或る男、其姉の死』『自転車』関連草稿六)
- 10・18 午前七時より学習院正堂にて創立記念式。その後、第四回陸上運動会を開催。高飛の一等(六尺二寸)は土屋止直、二等(六尺)が志賀直哉。棒飛の一等(九尺七寸)は海江田幸吉、二等(九尺六寸)は毛利鉄之助、三等(九尺)が志賀直哉。(M33・12「学習院輔仁会雑誌」53号「雑報」)
- 11・3 学習院で午前七時より天長節の式典、その後、学生一同、青山練兵場における観兵式を陪覧。(M33・12「学習院輔仁会雑誌」53号「雑報」)
- 11・13 学習院学生一同、赤坂離宮にて菊花拝観。(M33・12「学習院輔仁会雑誌」53号「雑報」)